



海外商品に対抗するため、日本の農業は収穫量の増加や高品質化などの必要に迫られている。高齢化も進み、省力化も課題だ。

エーディエス(千葉県柏市、後藤秀樹社長、04・7160・2355)は琉球大学と共

琉球大 エーディエス

同で、センサーを利用した農作業支援システムの開発に取り組む。サトウキビ畑やマンゴーのビニールハウスなどに設置したセンサーにより、土壌や空気中の温度、日照量などを測定。データを琉球大が解析し、水やりや刈り取りなど農作業の時期や量を指示する。後藤社長は、「民間非営利団体(NPO)などを作

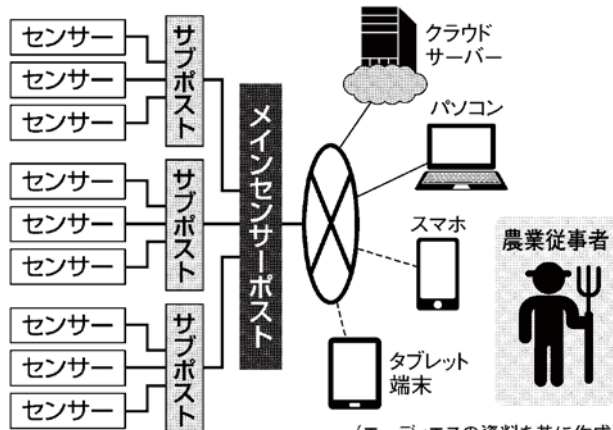
り商用化する考えだ。きつかけは2014年。後藤社長は、再生可能エネルギーを水素に変えて燃料電池として使ったための実証実験の相談で琉球大を訪れた。

そこで琉球大農学部の上野正実教授と川満芳信教授に出会い意気投合。同社がセンサーネットワークの優れた技術を持つことから、

農業支援システム

センサーを利用

農業用センサーネットワークのイメージ



(エーディエスの資料を基に作成)

農業の利用につながった。15年春から共同研究をはじめ、16年3月にシステム運用を開始した。高いコストや実証試験に参加する農家がまだ少ないという課題はある。後藤社長は「農協などと協力し、農家の数を増やしたい」と意気込む。

上野教授は「農業やエネルギーの情報を基に離島間のネットワークを形成し、太平洋の島々や、アジア・アフリカの大陸内部にある農村地域などにも展開したい」としている。

(木曜日に掲載)